

木村定三コレクションにみる、早川春泰の消息

仲野 泰裕

木村定三の書簡によれば、熊谷守一（1880-1977）は瀬戸で陶器に絵付けをしたり手びねりによる作品を制作しており、その作品の一部が木村定三コレクション（以下、コレクションという。）に含まれている。守一は、岐阜県出身であり、美濃に知己の陶芸作家がいたことも考えられる。しかし素地制作などを手掛けた作家は、瀬戸のしかもあまり著名とは言えない、むしろ無名に近い作家であった。地元瀬戸においてもその生没年すらも知られていない村瀬善九と早川春泰であった事は、二科会で活動していた北川民次（1894-1989）や、守一を支援した木村定三の存在が大きかったと考えられる。ここでは、コレクションの中から、早川春泰の消息を辿る手がかりを見出そうとするものである。

生没年について

コレクションにある早川春泰の作品は志野茶碗を中心に13点、春泰の制作した素地に熊谷守一が絵付した志野茶碗が4点、守一が手びねりした作品に春泰が施釉、焼成した作品が1点知られている。さらに今回、美濃・瀬戸の伝世資料に春泰が箱書した例を8件確認することが出来た。また、これらの内の多くの作品の共箱に、春泰の年齢が合わせて記述されていたことが、以下の推考の契機となった。

木村定三から守一に宛てた、昭和十六年七月四日消印の書簡0390^(註1)には、「(略)先日瀬戸にて先生(守一)に絵を描いて頂きました志野の茶盃の中四個が焼き上がりましたが、蠶螂の茶盃が一番良い出来です。後の分を楽しみにしています。(略)」とある。前者が「蠶螂絵茶碗」(M771、目録Ⅱ-429)始め4点であったと推察される。ただ、この4点には、春泰の箱書は伴わない。しかし他の春泰作品に認められるのと同じ彫銘(写真1)があり、素地は春泰作と判断することが出来る。さらに「志野の茶盃の中四個焼き上がり」とあり、さらに茶碗が数点あったことも考えられる。また手びねりにより守一が制作し彫銘を施した「志野盃」(M2228、目録Ⅱ-313)には、箱蓋表「作 盃 守



写真1 「志野茶碗 銘 十三夜」
(熊谷守一絵付、M768、目録Ⅱ-432)に見られる早川春泰の彫銘

註1 石崎尚・福井淳子(編)「木村定三と熊谷守一をめぐる往復書簡」『愛知県美術館研究紀要第23号木村定三コレクション編』、2017年。

一（銘）」に加え箱底外面「志壁 盃
八十一翁春泰 ヤキ之 白文円黒印」(写真2)の墨書がある。書簡等の記述から、守一と春泰との共作は一度であり、この「盃」は、「後の分」に含まれるものと考えられる。書簡の記述に基づき、昭和十六年（1941）の制作であることが分かる。さらに、この「盃」の箱書により昭和十六年に春泰は81歳であった事が分かり、これを逆算すると、万延元年（1860）生まれとなる。これにより、幕末に生まれ、主に大正・昭和にかけて活動した作家であったことが推察される。さらに、没年については昭和三十年頃とされる風聞もあるが、それを裏付ける資料は確認できていない。ただ、数寄者・茶人として知られる益田鈍翁（本名・孝、1848-1938）が、大正十二年（1923）の関東大震災の後、名古屋に疎開していた頃、春泰の元を訪ねたとされることから、当時の茶人の中で一定の評価を得ていた作家であったことを示している。なお、箱書にある年令を考えると2点を除くすべてが、守一との共作以前の時期を示しており、その8年ほど前から木村による春泰の作品の収集が始まっていたことがわかる。また、瀬戸の作家とされているが、狭義の瀬戸（旧瀬戸村）なのか赤津、下品野など村ごとに、それぞれ異なる特徴のある窯業地であり、工場の所在地についてもさらに調査研究が必要である。



写真2 「志壁盃」(M2228、目録Ⅱ-313)の共箱には「八十一翁 春泰ヤキ之」の墨書と白文円黒印

伝世資料の鑑定

春泰の足跡をものがたる資料は、限られた作品以外には知られていなかったが、コレクションの中に、伝世資料を鑑定した「〇〇春泰証」の墨書と白文円黒印を伴う例を8件確認^(註2)することができた。さらにこれらの内、1件を除き「七十七翁」など年齢の記述がある他、山茶碗（M818、目録Ⅰ-8、^(註3)）では、共箱蓋裏に「行基ヤキ 平茶盃 銘一文字 七十七翁春泰証」の墨書と白文円黒印、黒織部茶碗 銘 唐人笠（M560、目録Ⅰ-152）では、共箱蓋表「天正時代 黒織部茶盃」、蓋裏「銘 唐人笠 七十八翁春泰証」の墨書と白文円黒印（写真3）が認められるなど、銘を付けた例も確認できた。従来、春泰の活動について知られていなかった一面である。そして、これらの鑑定された作品の内、餉袖

註2 早川春泰鑑定の事例：山茶碗（M818、目録Ⅰ-8）箱蓋表「行基ヤキ 平茶碗 銘一文字 七十七翁春泰証 白文円黒印」。黒織部茶碗（M1139、目録Ⅰ-155）箱蓋表「黒オリベ 茶盃 銘 五月雨 守一（銘）」蓋裏「新兵衛作 七十七翁春泰証 白文円黒印」。黒織部茶盃 銘 唐人笠（M560、目録Ⅰ-152）箱蓋表「天正時代 黒織部茶盃」蓋裏「銘 唐人笠 七十八翁春泰証 白文円黒印」。織部香合（M1508、目録Ⅰ-161）箱蓋裏「ヤキメシ古織部 香合 七十九翁春泰証 白文円黒印」。織部扇形鉢（M1338、目録Ⅰ-203）箱蓋裏「秋二作 織部 鉢 七十八翁春泰証 白文円黒印」。黄瀬戸葵紋筒茶碗（M789、目録Ⅰ-189）箱蓋表「春岱翁作 黄瀬戸 筒茶盃 七十八翁春泰証 白文円黒印」。鶴斑袖手付鉢（M1350、目録Ⅰ-174）箱蓋裏「春岱翁作 宇ノふ手鉢 七十九翁証 白文円黒印」。餉袖角鉢（M1334、目録Ⅱ-474）箱蓋裏「アメ 古瀬戸 角鉢 春泰証 白文円黒印」風呂敷「貴」朱印。

註3 目録番号に「Ⅰ-」が付くものは、「木村定三コレクション日本陶磁目録Ⅰ」『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編第29号』（2022年）を、「Ⅱ」が付くものは、本号の「木村定三コレクション日本陶磁目録Ⅱ」を指す。



写真3 黒織部茶盃 銘 唐人笠 (M560、目録 I -152) 箱蓋表「天正時代
黒織部茶盃」蓋裏「銘 唐人笠 七十八翁春泰 白文円黒印」

角鉢 (M1334、目録 II -474、蓋裏に「アメ 古瀬戸 角鉢 春泰証 白文円黒印」) は木村定三の開催した3回目の「卒軒流無作法茶会」(昭和五十三・1978年、^(註4))において、本席の菓子器として、黒織部茶碗 銘 唐人笠 (M560、目録 I -152) は6回目の「上飯田小茶会」(昭和六十二・1987年)において、本席の茶碗として使用されており、木村の美意識に沿うと共に、春泰の鑑定についての信頼度の高さを示している。

春泰の評価

コレクションの日本の現代陶芸作品の内、国の重要無形文化財など著名な作家の作品は極めて少ない一方で、木村の美意識にかなない収集対象となれば、多数収集される傾向にあった。例えば加藤孝一の作品は、テラコッタであることもあり149点と群を抜いているが、小山富士夫、今井康人、上田恒次、岩田安弘を除けばいずれも二けた以下であり、それに次ぐ早川春泰の作品は13点を数える。これに加え、守一との共作が5点、さらに春泰の鑑定作品が8件ある事は、木村の高い評価を窺うことが出来、好みの作家のひとりであったと考えてもよいであろう。コレクションは、新たに収集されると個々の作品ごとに、二重の風呂敷が新調され、それに包まれて収蔵されているのが原則である。風呂敷の角の部分には、三角の白地が設けられ、作品名、銘、作者名などが記録され、時には作品のスケッチが加わる例もある。



写真4 朱丸印例：春泰作
志堅茶盃 (M823、目録 II -435)

合わせて木村の評価が朱丸印などで表現されている。感動と思入れの深さをものがたっており、春泰の作品には三点の朱丸印 (写真4、^(註5)) が散見される。

註4 茶会記録 コレクター木村定三研究の基礎資料：資料編『木村定三コレクション研究報告書2』 愛知県美術館、2008年。

註5 春泰鑑定の「飴釉角鉢」(M1334、目録 II -474) の風呂敷には「貴」の朱印が認められる。

さらに早川春泰の作品が、木村の美意識にかなったものであったことは、10回目で結果的に最後となり、区切りとも言える、「東海道膝栗毛 富士遠望船中遊楽茶会」(平成九・1997年、^{註6)})において、寄付の茶碗として「春泰作 ニツ銘志野茶碗 即中斎 銘将棋駒熊谷守一 銘黒色尉^{註7)}」(M824、目録Ⅱ-436)、同「春泰志野 即中斎 銘狂言面」^{註8)}(M828、目録Ⅱ-440) が用いられたことから明白であった。

また、春泰の作品は幕末の名工加藤春岱を強く意識したものと考えられるが、コレクションに見る限りでは、織部敷瓦(M1254、目録Ⅱ-445)を除くすべてが志野である。志野釉には、一定の完成度は認められるものの作域が広いとは言えない。

筆者は、かつて「木村定三コレクションの茶陶」展を愛知県陶磁資料館において2006年に開催^{註9)}したが、当時は早川春泰についての認識は浅く「志野茶碗 銘 二本差し」(M823、目録Ⅱ-435)を紹介するに留まっている。今回箱書等の精査により、幾つかの手がかりを示すことが出来た。さらに事例を増やすことにより内容を深めてゆきたい。

本稿をまとめるに当たり、下記の方々のご協力と貴重な御教示をいただいた。記して御礼申し上げるものである。

石崎尚、前田博、武藤忠司、山内美穂(敬称略)

註6 註4に同じ

註7 作品の表記は茶会記より。能面に白式尉、黒式尉があることからの発意と考えられ、あえて同音の一字「色」に替えて鼠志野茶碗(M824、目録Ⅱ-436)の銘に用いている。同様に小山富士夫作班唐津茶碗(M765、目録Ⅱ-352)に白色尉、種子島茶碗(M528、目録Ⅱ-354)に黒色尉の銘が認められる。能面に沿って読めば「こくしきじょう」となる。

註8 作品名の表記は茶会記より。

註9 『愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションの茶陶』愛知県陶磁資料館、2006年、展示No. 117。

愛知県美術館研究紀要 第30号 木村定三コレクション編

2024年2月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for AOMOA (Aichi Prefectural Museum of Art) features the lowercase letters 'aomoa' in a stylized, rounded font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, lowercase sans-serif font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.30

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2024

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2024 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.